

認知と認識（赤と緑）のお話

大人の食育書『いしかわ旬の鮭だより百選譚』の「85. サケ 鮭」～「87. イボダイ 疣鯛」にかけて、「人が感覚として認知しているものが、他人と全く同じ感覚として認知しているかは、見えないし、誰にも分らないし、証明できない。」と述べたのだが、それらの考えが（自分自身の中でも）埋没してしまいそうな気がして、再度取り上げることにした。ここで言う認知とは：外界にある対象を知覚することや、なんらかの五感による気づき。認識とは：外界から得たそれらの情報（認知）が、意味づけされた上で意識され、何らかの分類に振り分けられたものと解釈し使用している。（従前通り）

なぜ再掲したのかにはまだ理由がある。四半世紀くらい前から（それが何年何月何日何時何分何曜日は不明）人と主に会話（認識の摺合せや共感を得る）の中で、漠然とこの人とは本当に頭の中（意識）が本当に一致しているのかと、また意識が一致していても、本当に認知レベルで同じと感じているのかがどうも気になってしょうがなかった。ただ、認知が違っていても認識（意識）が一致していれば、会話は成立するし共感も得られるので支障はないのであるが。それが染みついてしまって、どうにも仕方がないのである。

2014年秋頃であったと思うがNHKラジオの午後の番組で東京女子大学黒崎教授が出演していた番組において、赤と緑の話がされていた。その時、直感的にああ同じだと共感したが、黒崎先生は哲学者。その共感のレベルは月とスッポンであるに相違ない。

やはり、認知の数値化や可視化はどうも無理であるような気がするし、認識の表現も十人十色、千差万別であり、Aさんが赤と認知し、赤と認識したものが、Bさんには緑と認知され、赤と認識される可能性は否定できないし、証明は不可能であると確信した。

先日、冷凍庫の中のととてもよく冷えた金属製の器に触れた瞬間、思わず「熱っ」と口走ってしまった自分に気付いた。幸い近くに誰もいなかったので全く何の影響もないのであるが、冷たいと認知しているはずであるべきその表現が「熱っ」となってしまったのは、何か良からぬ病気の症状の一つなのか、誰にも見られたり、聞かれなかったことを幸いに放置することとした。生活には全く支障はないし、他人様に迷惑もかけていないはず。当然、医療機関の世話には至っていない。それでも、一抹の不安はある。もう平均寿命を残すところ約3分の1に至る現在、加齢による一般的な他者との認知の相違が徐々に増加してもおかしくはない。川岸に近づいているのは事実だが、その相違がよく分らない。

最近、味覚の新しい認知に出くわしてしまった。それが良い（美味しい）認知であれば幸いなのだが、残念ながら逆である。どうやらそれが一つではなく、多くの食品に蔓延しているのではと気付いた。それを意識（認識）レベルで表現すると「お金の味」となる。